附記　保育者の記憶画については〝幼児の観察教育の盲点について〟と題して既報をまとめて次会で発表する予定である。

幼児の色の好みに関する研究

川村短期大学　帆足喜与子
吉田洋子

幼児の色の好みの傾向を知るために、昭和三四年及び三五年の真夏に次のような調査を行なった。赤、黄、桃、黒、青、紫、緑、肌、茶、黄緑、白、橙　の十二色の色紙の中から最も好きな色を上げると約束して選ばせた。自分のものにすることによって、好きな色を適確に選び得ると考えたからである。対象は、四、五、六才男女計一四九八名で、地域は北海道から九州にわたっている。民族的な関心から、アイヌ人及び日本在住のアメリカ人をも調べてみた。

色の好みに年令差があるであろうか。統計的に有意義な差は見出されず、特に女子にその差が少ない。ただ目立ったことは、男子の四才から五才にかけて赤を好むことが減少し、黒、紫が逆に増加していることである。

さて、男子と女子の色の好みをみると、男子は青を、女子は赤を著しく好んでいる。そして男子は、桃、橙、肌が極めて少ないことを除いては好みが女子に比しかたよっていない。女子に好まれた色は赤か黄、桃の三つの暖色が非常に多い。それに次いで橙、次いで肌色が好まれているが、他の色は目立って少ない。（第一表参照）

	男	女
赤	48	205
黄	74	109
桃	8	142
黒	80	9
青	153	33
紫	89	25
緑	87	27
茶	46	7
黄緑	46	18
肌	13	52
白	43	51
橙	13	77
	720	750

第一表
色の好み（男女別）
（全国）

	男	女
1	青	赤
2	紫	桃
3	緑	黄
4	黒	橙
5	黄	肌
6	赤	白
7	黄緑	青
8	茶	緑
9	白	紫
10	肌	黄緑
11	橙	黒
12	桃	茶

第二表
好まれた色の順位
（全国）

季節によって好みが異るかをみたところ、男女ともに春に緑が多く好まれ、夏に男子に青、女子に白が多い。また春に女子に桃が非常に好まれている。このようにして、季節によって色の好みの異ることが統計的に有意義な差をもって示された。

地域による好みの差を見るために、東京以北、東京、東京以西の三つのブロックに分けて比較した。男子において統計的に差はないが、相当にちがいはみられた。女子においては、東京において、青、緑が好まれ、橙が好まれず、東京以北では、茶が他と比べ割に上位にあること、東京以西では白が上位にあることが目立ち、地域的に有意義な差が見られたのである。東京では、他地域に比しやわらかい色が上位にある。

民族別にみると、男子の場合、殆ど差は認められないが、女子の日本人（北海道小樽の日本人）とアイヌ人と比べると、後者が黒、

紫、青といった暗い色を好んでおり、前者は同じ北海道におりながら桃を多く好んでいる。また最も日本的と一応目してとり出した東京浅草の日本人女子と、東京在住のアメリカ人女子とを比すると、日本人が桃、紫を好むに対し、アメリカ人は橙、青を好んでいる。

以上、年令別、男女別、季節別、地域別、民族別の考察の結果は、すべて常識を確認、証明するものであったといえよう。例えば日本人女子が桃、紫を好み、アメリカ人が刺戟の強い色を好んでいるのも興味深い。アイヌ女子が暗い色を選ぶのもたやすく理解できる。また地域的にみて、東京ではやわらかい色が上位にあり、東京以北に茶が、以西に白が多いのもそれぞれうなづけそうな気がする。全体的に色調が北より西の方が明るかった。季節的には春はあわい色が好まれているといえるであろう。

わたくし達の調査で気づいたことは、地域や季節の影響が予想以上に大きく、また仔細には、幼稚園によって橙が多く好まれたとか黄が多かったというように、特色がみられたので（子ども同士互に模倣して選択しないように方法を講じてあったので、めいめい独立に色を選んだわけだが）色の好みについて環境的影響は思いの外大きい。身近には受持教師によって色の好みが影響されることが推測される。季節的影響についても、子ども自身の季節感によって自らふさわしい色を選ぶというより、おとなの季節感による色の好みが子どもにうつっているとみるべきように思う。アメリカ人の子どもが「ママがわたしに似合う色は青だといった」とて青を最も好む色としたのなど、おとなの与える環境を子どもが直ちにうけとっている端的な例であろう。それ故衣服や子ども部屋の色彩が子どもに如何に大きな影響を与えるかがうかがわれる。

男子は日常、赤系統を女の色として退け、黒茶などを選ぶのを見かけるがここにも教えられた色の好みがみられるように思う。しかしそれにも拘らず男子の色の好みが幅広く、女子がはるかにかたよっている。

一方本調査によって、子どもに好まれる色を与える際の参考資料が得られたと思う。

最後に本調査に御協力下さいました各幼稚園、保育園に対し厚く御礼を申し上げます。

（大会抄録52—56頁）

幼児向絵本にあらわれた語いの調査

（第一報）

埼玉大学　野間郁夫
東京学芸大学付属幼稚園　高杉自子
東京・魚籃幼稚園　山田巌雄
国立国語研究所　村石昭三

一、調査目的　絵本は言語指導の有力な一つの方法を提供するものである。絵本を用いて言語指導が展開されるとき、その七五％の場合は指導の前または後において絵本の中の文章を教師が読んで聞かせており、時々読んで聞かせる場合を含めると九六％の場合は絵本の文章が読まれている。（昭和三五年度保育大会発表）すなわち幼児に聞かせる標準的な話しことばとして、また話し合いの大きな話題を提供するものとして絵本の中の文章は重要な役割をもっている。

このような絵本の中でも月刊絵本の占める役割は大きい。幼稚園備付け絵本の七二％は月刊絵本であり、前記の指導に用いられるのはほとんど月刊絵本である。そこでこの月刊絵本の中の語いを調査